成人映画

9

成人映画・目次　9月号

内田高子　P. 16

緑　魔子　P. 13

リズ・テイラー　P. 14

表紙・加賀まりこ

松竹専属スター。日生劇場の「オンディーヌ」の再演に出演。次回作には「恐山の女」の主演が予定されている。　カメラ・吉岡康弘

ピン・アップ かのかづ子

「ヒップで勝負」「未公開の情事」などに出演。独立プロのユニークな存在。九州出身21才。カメラ・本誌特写

特集・悦楽
創造社製作
松竹配給

◆中村賀津雄をめぐる四人の女

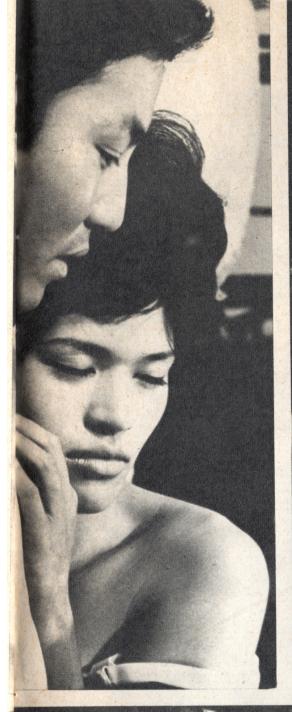
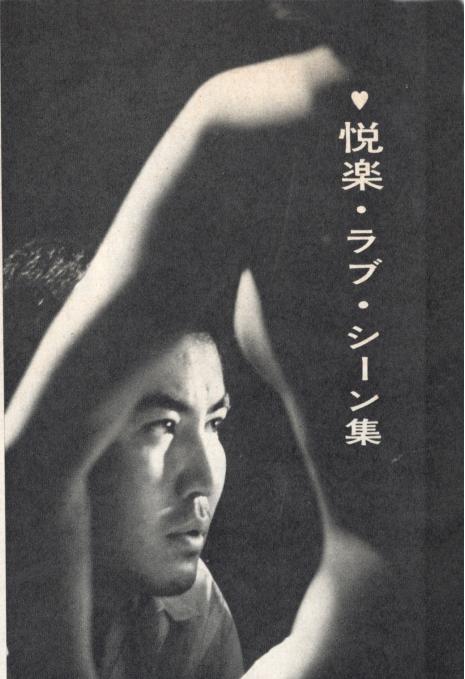
眸　**野川由美子**
バーのホステス。月百万円出すと脇坂にいわれ、豪華なマンションにうつり、二人だけの〝密室のセックス〟がはじまる。眸は、全身整形手術までして素晴らしい美人になるが、昔、関係していたヤクザの親分から「ヨリをもどせなければ指をつめろ」とおどかされ、ぷつりと切りおとす。

志津子　**八木昌子**
サロンの女給、店にきた脇坂に誘われアパートで強引に犯される。郊外の一軒家を借りきり雨戸をしめた中での愛慾生活にふける。はじめはまったくの受身だったが、脇坂の激しい要求で、だんだん積極的になってくる。そこへある日、突然病身の夫が子供をかかえてやってくる。

圭子　**樋口年子**

インテリ女医。医者から接吻されているところを、脇坂に見られたのがキッカケでくどかれる。「愛情を感じたら結婚する…」といい、二人で北海道に旅するが、その間は体をゆるさない。帰京後、晴れて結婚するが、冷感症のうえ、セックスが終るたびにウガイをし、局部を洗浄して、脇坂を失望させる。

マリ　**清水宏子**

オシで白痴の街娼婦。小さな酒場の二階を借りて、商売をしている。獣のように、全身をなめまわし、昼も夜もまつわりつく。一ヵ月の約束でアパートで同棲するが、脇坂が目をはなすと、街角にもどったりする。脇坂に〝性の観喜〟をはじめて味あわせてくれた技巧と、素晴らしい肉体の持主。

♥悦楽・ラブ・シーン集

悦楽

人間を買おう！
女を買おう！
くみつくせ！性の悦楽
残るは一年のいのち
抑圧された男が
死を賭してたどる悦楽の旅

〈悦楽〉とはなにか。ものを買うことである。金さえあれば、なんでも買える。ベトナムを見よ。国家だって買えるのだ。しかし、最高は人間を買うことである。

だが、私たちは買う側であるよりも買われる立場に立っている。そうした立場にある主人公、性的に抑圧された一人の男が、自らの死とひきかえに、性的解放の旅にでる。すなわち、人間を買う立場に立ってエロティシズムの極地を探っていくという物語である。そうした仮構のなかで、買われる者の弱さ、愚かさ、そして美しさが十分に描き出されるであろう。

それは私たちの自画像である。

それに買う者の姿が加わる時、私たちの自画像は一幅の地獄絵となる。

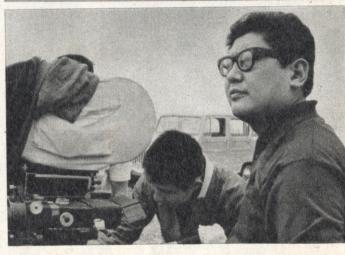
この世に買われて生きるほかない私たちの〝怒りと悲しみと絶望〟によってその地獄絵は絢爛と色どられないわけにはいかないだろう。

大島渚監督インタビュー

―連日七時半から翌朝の四時ごろまでの徹夜撮影となった理由は―「みんなで、ふくろう撮影方式だなんていってるんです。理由は主役の賀津雄クンが東宝芸術座の八月公演「この気持ちを…」それにまりこクンが日生劇場の「オンディーヌ」八月再演で、それぞれ舞台稽古にとられるので、体のあいているときは夜半しかない。結局、夜動くフクロウのようになったわけですよ」

―結果としてはどうですか。

「昼より能率的に撮影ができるんですよ。スタジオには冷房設備がない、昼の炎熱地獄のセット撮影よりも、夕涼みのできる夜の方が楽なんですよ。わけてもベッド・シーンが多いので、ホテった体を夜風にあてる方がいいわけです。この夜半方式だとかけ持ちで忙しい人でも最高のキャストが組めるわけです」

―全篇これベッド・シーンだし、この作品でエロ・ヌ

―ベルバーグが生まれるんじゃないかという声もありますが。

「世はまさにセックス時代ですからね。やるからには徹底的にやり、ヒットする作品にしたい」

―中村賀津雄さんにゾッコン惚れて、主役をあてたそうですけど。

「〝怪談〟の耳なし芳一の演技をみて感心したんですよ。これだ！と思った。みえを切る芝居に染まらない人だし珍重すべきいい役者です」

―加賀まりこさんはいかがなりや。

「これもいいんです。才女ですよ。ボクは第二の岸恵子だと思いますね。カンがいいし、女優としての素質をフンダンにもっている楽しみな人です。東西随一の女優といえばオーバーかな」

―セックス、ベッドシーンの連続で、かなりきわどい場面の連続だけど、映倫との問題は。

「映倫では台本をほとんど〝要注意〟の指定をしてきてるんです。なにしろ〝女を買う〟話なんだから批判はありますよね。しかし、性的にも、階級的にも抑圧された人間が女を買う立場に回ったときどうなるか―そうした不幸ななりゆき、状況をこの映画でみつめたいということです。

テーマがハッキリしているし、必然性のあるセックスシーンだから、問題が起こるような撮り方はしませんよ。とにかくできたものをみて下さい」

―この作品はヒットする自信ありますか。

「映画作家ならみんなそう思って、仕事してますよ。セックス映画時代だが、テーマのある決定版にしたいですね。うんとヒットしてくれるとうれしいんだがなあ」

加賀まりこ

〈ものがたり〉

映画は青春を抑圧された学生の脇坂篤（中村賀津雄）が家庭教師をしていたころ、美しい教え子匠子（加賀まりこ）を愛したため、人殺しをする。その現場を公金横領犯の速水（小沢昭一）から目撃され、逆に三千万円を隠匿しなければならない羽目になる。

四年後、匠子が結婚することを知り、人生に絶望、速水が五年の刑期を終えて、ムショから出てくる前に、預った公金をばらまき、四人の女体遍歴の悦楽の旅に出る。

まずはじめの女はバーのホステスの眸（野川由美子）金食い虫で、自分を美しくみせることで、精一ぱいの現代的な女。二番目はサロンの女給の志津子（八木昌子）肺病の夫と子供をかかえていて、月百万円で悦楽の契約を結ぶ。彼女はなよなよとして、男がいじめたくなるような女であった。つぎはインテリ女医の圭子（樋口年子）だ。頭デッカチで、セックスも割りきった考えをもつ理智的な女。四人目は街娼婦のマリ（清水宏子）だ。オシのうえ白痴で、全身がセックスそのもののような女であった。そして最後に脇坂が愛に破れた匠子が登場して、裏切られてしまうのである。

インテリ女医の圭子、樋口年子は脇坂（賀津雄）がひざまずいて関係を請われる女だ。北海道の白糠海岸ロケでは関係を迫られて、彼女が海の中に、ジャブジャブ入り、波が首にまで達する—というシーンを撮った。太平洋の荒波は予想外に冷たく、四回のリハーサルに、樋口は体の感覚がなくなるまで冷えきってしまった。それこそ〝冷凍人間〟である。遠浅なので、彼女は足を折って、首までつかったシーンを撮り、さらに海から上ってくると賀津雄と砂浜で熱烈なキスをする残酷撮影。

〝お疲れさん〟の声とともに民家のフロに入って、やっと人心地がつくという始末。樋口の役は〝冷感症〟という設定なので、〝これじゃ役通り冷感症にもなりますよね〟とスタッフが同情することしきりだった。

冷たい海にジャブジャブ入る樋口年子

キャスト編成で一番苦労したのはオシで白痴のマリの役。大島監督は「エロダクションの女優さんはほとんど会いましたね。なかにはいい人もいたんだが、欲が出ちゃってねえ」といいながら結局、ドタン場で決ったのが、俳優座養成所を卒業した新人の清水宏子（二一）。映画出演は初めてで、全裸シーンやら、賀津雄の全身をなめまわす大変な芝居まである。

恵まれた“お天気おんな”加賀まりこ

浜辺でハマナスをつむシーンをやるのが匠子の加賀まりこ。珍らしく好天に恵まれて、彼女は一日の出演で、サーッと帰京してしまった。北海道ロケはあいにく雨にたたられ、雨に追いかけられたようなロケ隊にとって、まりこは恵まれた〝お天気おんな〟でもあった。

約一カ月間、女優さんを、とっかえひっかえベッド・シーンばかり演じてきた賀津雄は、久々に公金横領犯の小沢昭一と芝居をすることになった。ところが、タイミングが合わず、ピタリとはまらない。小沢が「あんた、一カ月も女性と抱っこちゃん演技ばかりやってたんで、男のオレじゃ気分のらないんだよ。正常じゃない。オレが元通りに直してやるよ」と抱きついてくるので、賀津雄「ギャア、許してくれ、一人で元通りになるよォ」

一カ月も女を抱きつづけた中村賀津雄

★今月のスクリーン・エロティシズム
——新作紹介——

●不倫（大映）川崎敬三・若尾文子・江波杏子

妻（若尾文子）と二号（江波杏子）と夫（川崎敬三）の三人が一つベッドに寝て、交互にセックスを行なうという奇妙な生活を描いている。宇能鴻一郎の原作の映画化で、監督は田中重雄。

若尾は控え目で弱々しい植物的な淡白さで終り、江波はときには紐やムチを使う雄と雌との猛々しい奪い合いにのたうつという大胆なベッドシーンもある。映倫がこれぞ成人映画の見本といった映画。

●かも（東映）

梅宮辰夫・緑魔子・大原麗子

　ヒットしている〝夜の盛り場シリーズ〟の第四作。女をかもってはホステスに売り歩く男（梅宮辰夫）を主人公に、都会の悪徳の中に、不思議な逞しさを持って生きる男と女を描いている。
　梅宮はバーテンキャップだが、バーのホステスをタライ回しにして銭を絞りあくどく稼ぎ女をかもって生きる男。ホステスの緑魔子もクラブに売られ、おまけに梅宮の子供を無理矢理おろされ、性病にかかる。緑は友人の空手部の学生に復讐させ、倒れた梅宮のポケットから七十万円の金を抜く…。大原麗子共演。監督関川秀雄。

●コレクター（コロムビア）

ズブの素人二人を主人公に選んだサスペンス・ドラマ。息づまるシーンの連続は、最近ちょっと類をみないものすごさである。物語は、蝶の採集だけに興味をもち、他の誰ともつき合うことをしない青年が、ふとしたことから心をひかれる女性にでくわしたことに端を発する。蝶を採集するのと同じ要領――クロロフォルムをかがせる――で、青年はその女性をまんまと誘拐し、郊外の一軒家にとじこめてしまう。女は必死に逃れようとするが、そのつど失敗してしまう。あるときは隣人がその家に訪ねてくるが青年は女を浴室に監禁してしまい、水を流して危機を知らせようという女の計略も実を結ばない。そのうち、ついに青年は女を暴行し、その果ては殺してしまう。数日後、再び青年は雌蝶を求めて、クロロフォルムを手にし、車を走らせてゆく。残忍さと恐怖、これが解決をみぬままに、再び行なわれることを暗示するラストはことにせんりつをおぼえる。

●禁断（東京第一フィルム）

セックスの自由で知られるスエーデンでも、その上映をめぐって論争がまき起ったほどショッキングなシーンの連続する作品。古い因習を嫌って自ら肉体を汚す娘、花嫁にいどむ片想いの青年、果ては全裸でベッドで夫を待つ新妻、だが現われたのは見知らぬ男で、そのまま犯されるというように…。

アメリカ版 エロダクション情報

水野和夫

ブロードウエイが七番街と交叉するのがタイムズ・スクエア。ニューヨークの超一流ロードショウ劇場はこの周辺にかたまっている。そしてタイムズ・スクエアから南へ五ブロック下った四二丁目は浅草か新宿歌舞伎町に似たたたずまいである。この周辺に林立するビルの一階、あるいは地下がほとんど映画館になっている。各映画館のネオン・ボードは肩をならべるようにひしめきあい、ちょっと異様な雰囲気だ。この映画館群のほとんどが三本立て。普通映画の上映館で入場料が一ドル五十セントから、三ドル五十セント程度なのに、ここでの入場料は一ドル弱。それでいて内部の設備は立派なものである。

これだけ三本立劇場が揃うと当然作品本数の不足が問題となる。大作主義で本数減少を来したメージャー・プロダクションの間をぬって、ここでもエロダクションは大進出をとげた。日本におけるエロダクション・ブームに先んじること五年である。

こうしたエロダクション・ピクチュアの内容はまったく日本と似たりよったり。劇場内の雰囲気もまこと世界は共通したもの——男性観客が圧倒的に多い。隅の方ではゴソゴソとなにごとかを行為している組もいくつかある。もっともこれはアメリカの場合、一流劇場でもまま見かけることだからとり立てるほどのものではないかも知れない。むしろ白も黒も黄も、まったく肌色の区別なしにこの暗がりの中で、エロを楽しみ裸をめでる大らかな行動の方に興味を感じさせられる。

「痴情」の一場面

ワンサ・ワンサと裸が出て来るのがやはりエロダクションの特徴。日本のようにムーディな描写よりむしろ直接的な裸体の誇示やサイコロジカルな物語が多いのはお国柄だろうか。これはアメリカが州毎に検閲権をもち、映倫の審査に加えて各州のうるさ方の目がようしゃなく上映禁止にしてしまうところから来たものでもあろう。裸体そのものをカラカラ写し上げる分にはさほどの抵抗は感じないらしいのだが、情事の〝描写〟そのものにはうるさいのだ。

こうしたアメリカ版エロダクションの作品は最近、日本にも次々と輸入されている。輸入の自由化となれば当然ながら無数の業者が売りこみを開始するわけだ。「痴情」、「グラマー西部を行く」「ヌードカメラ情報」などなど。日本ではある程度一流の映画館にも登場した。

こうした群少エロダクションは別にスタジオをもっているわけではない。TVや映画の貸スタジオを使って製作するのだが、プロデューサーの家やホテルをかりきって撮影することも多いそうだ。

製作費をたっぷりつぎこんで、メージャー作品なみの大きさに近づけようと努力するのもあれば、日本のそれのように、わずか十日か二十日で完成させるものもある。

やはり海のむこうも人間の国——。その人間の欲望と趣好は同じなのである。

「ヌード・カメラ情報」

セクシー女優／乳房の美学

「ちんころ海女っこ」の扇町京子

前号の**「セクシー女優を勤務評定する」**では「脱ぎっぷり」「スタイル」「演技力」「将来性」について採点したら、書かれた女優たちから「ひどいじゃないの」「あんまりだわ」とさんざんイチャモンをつけられた。

文句をいってくるのは覚悟の前だったからまずは大いに成果はあがったわけである。

ところで、今回は**「乳房の美学」**と題して、セクシー女優の〝オッパイ論〟をやってみることにした。

最近、〝乳首〟を出しちゃいかん！などと映倫ではうるさいけど、そんならあの外国女優のストレートなオッパイ露出シーンはどういうことになるときたい。答えはきまって「外国の風俗、習慣が違うから…」という。日本の生活方式もアチラのそれとほぼ同様、シャワーも浴びれば、ベッドでも寝る。ブラジャーをとれば、外国女性に劣らぬ見事な乳房の持主もゴマンといるではないか。

ところで〝乳房〟とは一体なにか？…豊かなる乳房は女性をもっとも象徴している箇所である。

人間誰もが、母親の補乳によって生き育ち、愛情にはぐくまれた。

女性の乳房こそは永遠の愛であって、セックスそのものではない。なぜ一部に乳房をすぐセックスと結びつけるのか。それは、女性の生殖器の一部として解釈し、それを売りものにして、「婦人雑誌のトジ込み附録」で、生活費をガッポリ稼ぐなんとかドクトルとか、文筆・医者業（病人を診察するより、ペンで医学を切り売りする作家のこと）のなせるわざなのだ。そこでついでだから、その〝附録〟を抜すいして、乳房の項目をみたらつぎのような手引き？があった。▼ふくらみ…乳のいちばん高い部分の胸囲と、乳下の胸囲との差が5㌢以下の人は、乳が平らすぎだが、弾力があればいい▼乳輪（乳首のまわりの部分）の大きさは…未婚女性は3－3.5㌢が普通。それ以上の人は妊婦に多い▼左右不均等の乳房…人体の他の部分と同様に、左右は不均等なものだ。乳房は刺戟を与えると発達する。ペッティングなどで、一方だけを刺戟して不均等になるときもある▼乳首の色…だいたい20才ぐらいまではピンク色。25、26才までに、ひとりでに茶褐色をおびていくのが普通。ピンク色のは色素の少ない体質の人。茶褐色の原因はメンスが近づくと変色する体質。ざっとこんな説明であった。

この辺の状況とその女性の性生活を連想、推測して、みる人たちはセックスを考えるのである。

いま成人映画のなかに女優の乳房のシーンがなかったら、なんと味けないものになるか。ベッド・シーンに、シャワーシーンに、ストレートに乳首が露出するところに映画の楽しさがあるのだ。

そこで、オッパイはどんな型と色が一番いいのか、美学評論家の山根章弘氏は

「黒い雪」の紅千登世

「上向きのオワン型、その人のプロポーションに合わせてバランスのとれた大きさがいい」といっている。キングサイズ必ずしも最良とはいえないのだ。デッカイといえば、近年オッパイの肥大はアタマが弱い―という論がアメリカで流れた。これにカンカンとなったのが、ジェーン・マンスフィールド。彼女は大学の学士様〝アタマとオッパイは関係ないわヨ〟といきまいたとか。

最近みた女優の中ではキャリヤのある女優より、もっとも新しい女優に美的な型のものが多い。〝うずき〟の桂奈美のカッコよさ、豊かさはまずホレボレするんじゃないか。実物は日劇ミュージック・ホールの舞台でみられる。ほかはよくなかったが、オッパイだけは素適だった！というのが、「情事の履歴書」の千草みどり。雪の中を全裸で走るシーンでは適度なボリュームで、雪をとかすセクシーさを発散した。扇町京子はキャリアがあり、その大きからず、小さからずと、ほどのよさ、カッコよさは中年男を刺戟するそうである。「黒い雪」の紅千登世は十八才ながら、乙女らしい型であったが前にのべた乳輪が大きかった。

大御所松井康子は「おいろけ作戦」のときは、カッコよく新鮮さがあったが98センチの乳房に成長して圧倒的？　ビューンとしたというよりもソ連女的な巨大さである。そこがまたいいのさーというファンも多い。内田高子のはなかなかカッコいい。あるスチールマン氏は「あれは入れたのさ」とささやいたものだが、ベッド・シーンを共演した落語家スター氏は「そういえばなんかこう固いようでしたな」とニヤリとした。

肉感的というのは香取環、左京未知子百万ドルの乳房とはいえないまでもピンク映画の〝三百万円の乳房〟ともいえそう。とにかくピンク映画は〝乳房〟をどう美しく描くかがポイントでもある。女性の乳房は美しく永遠なれ！である。出し惜しみせずファンをシビレさすべきだ。

◀（右上より左へ）牧 和子、香取環、（右下より左へ）工藤那美、路加奈子

名前	近作	サイズ	型	アピール
松井康子	美人局	98	7	9
内田高子	処女喪失	94	8	8
橘　桂子	ヒップで勝負	84	7	7
扇町京子	つまみ喰い	90	8	9
香取　環	いろ盗っ人	89	7	9
かのかづ子	なぶる	83	8	8
森　まこ	冒瀆の罠	83	7	7
左京未知子	夜の女炎	95	9	9
光岡早苗	悪の痴態	85	7	8
千草みどり	情事の履歴書	88	9	9
工藤那美	00の乳房	87	8	7
志麻みはる	裸虫	95	8	7
桂　奈美	女の林	95	8	9
葵真由美	うずき	84	8	8
谷口朱里	密戯	85	8	8
紅千登世	黒い雪	87	8	8
路加奈子	白日夢	86	8	9

群少プロ、通称エロダクションの活躍はまことにめざましい。
　国映、新東宝、センチュリー映画、東京企画の四社による新チェーンが九月に発足と決まった。OPチェーンをふくめると、ことしは年間二百本も製作されることになりそうだ。
　現に新宿のある映画館では定員三百名の椅子が満員で、月六百万円の興収をあげているという。なぜかくもピンク映画がうけているのだろうか。

「色と欲」

ピンク映画通信

ハダカはホンモノでいこうよ！

まず第一にあげられるのは、不況であることだ。レジャーを楽しむためには金詰りで、ハデに出歩けない、そこで、ストレスを解消するにはなまぬるい邦画五社系の作品より、二本立て、三本立てのショッキング・シーンもあれば、ハダカ、ベッド・シーンもたっぷりとあるエロダクションをーということになる。
　第二は売春禁止法の施行以来、セックスの排け口をこの種の作品で代替しようということも考えられよう。第三は大手邦画五社のセクシー・シーンはいつも主演女優のスタンドインでごまかされてしまう。そこで　入浴シーン、ベッドシーンをまぎれもない主演女優でご本人がズバリとやってのける〃ピンク映画〃にこそ観客をシビレさす魅力があるというわけだ。そしてこれは地方に行けば行くほど歓迎されているのが現実なのである。このあなどりがたい現実が厚かった五社の壁をこわしつつあるわけだ。
　固く厚い五社の〃カベ〃をこわしている事実がある。東宝をのぞいた地方の準直営封切館ではエロダクション作品を安く買い上映している。つまり自社作品二本に、エロダクション作品一本をつけて公開しているのだ。なかでも最近、東映ではどうせこの種の映画を上映するなら、興行者と配給者の手間をはぶくため、全プロ編成と配給をやろうという説がある。「新ニュー東映」の誕生というわけだ。しかし東映の営業関係者は否定しているのだが……。
　かねてから注目されていた新チェーンが、いよいよ九月一週から発足することになった。
　名称は「独立チェーン」。参加の製作配給会社は国映、新東宝、センチュリー映画、東京企画の四社。
　八月五日共同記者会見を行ない、新チェーンの発足を発表したが、「成人映画」の質的向上と最近、乱立、乱作ぎみで、自から作品内容を低下させている面を防止し、興収と配収の増加をはかろうというのが目的なそうだ。各独立興行会社、各劇場のOKを得て、九月から毎週二本立て番組で公開してゆくが、チェーン参加劇場も増加する予定で、独立プロチェーンの連絡事務所は当分の間国映（TEL五七一－六四〇〇）

「清作の妻」

女　優

♥ 野川由美子

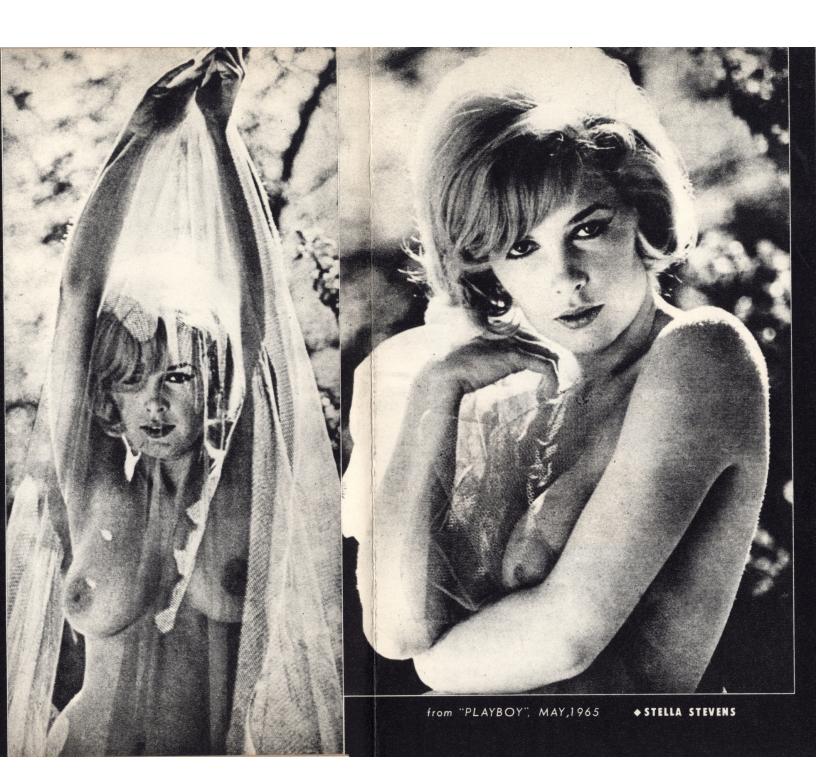
野川君は若いわりに演技が実にうまい。妙ないい方だが、そのことが実に心配なのである。申分なさすぎてもう少し欠点がほしいくらいだ。

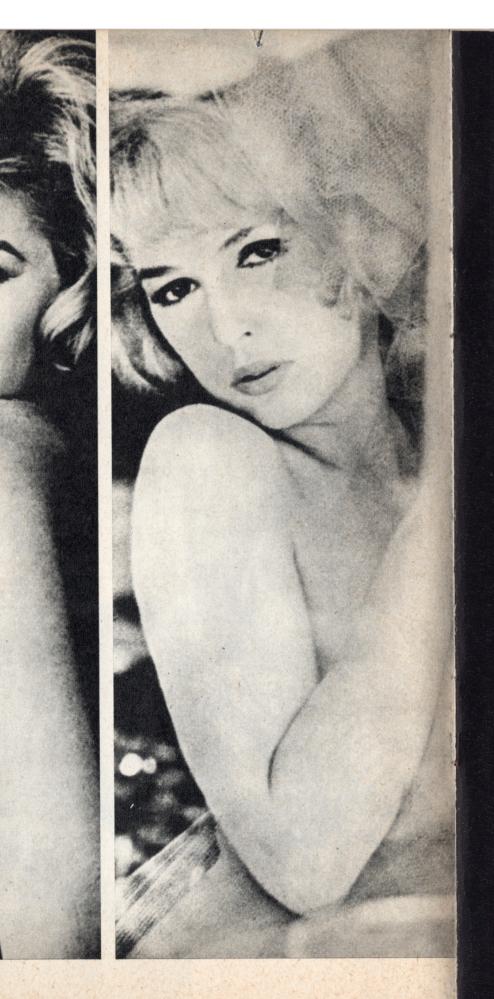
逆にデクの棒の方がよかった――などといえばボクの我ままになるかもしれない。

演技のカンもよく、実に自在に動く。これは現代の若い世代特有のもので、思っていることがすぐ体に出るよさだろう。

これからの彼女の女優としての問題はなによりも〝いい作品〟を選んで仕事をしてほしいということだ。

文・大島 渚
カメラ・本誌特写

from "PLAYBOY", MAY,1965 ◆**STELLA STEVENS**

ぬうどステラ・スティーブンス

「プレイボーイ」一九六五年五月号より

●密　戯（国映）谷口 朱里

新宿駅に降りた風来坊の繁二（若杉英二）は、身寄もなくどこから来たのかも分らない。リュウとした服装、ガッチリした体格、はなかなかの好男子だが、フトコロは無一文。コールガールユリ（谷口朱里）はきょうもカモを探しに新宿の雑踏にまぎれこむ。やっとみつけたカモが繁二だ。調子のいい繁二は大会社の息子を装い、ユリを騙す。ユリはいいカモに出会ったとよろこび、サービスするが、翌朝には繁二の姿はない。ロハで寝られたユリは地団太踏んでくやしがるが後の祭り。口八丁、手八丁の繁二は、ニセ刑事に化けたり、街頭のインチキトランプ師になったり、女をつぎつぎとたぶらかしときには代議士の二号（西朱美）に取り入ったり、またたくまに有名？になってしまう。一方、騙されたユリは復讐しようと、血眼で探し歩き、やっと新宿駅でつかまえるが、繁二は持っていた札束を全部ユリに渡し、〝元気で暮せよ！〟とどこえともなく消えてゆく。監督向井寛。

●悪の痴態（国映）火鳥こずえ

三十才、女盛りの洋裁店の女社長（城山路子）と養子の、工業会社々長（大原清）の夫婦はお互いに愛情がなくなり亀裂が生じている。夫の清の情婦（火鳥こずえ）はバーのマダム。二人は周囲の目を盗んで情事をくり返している。

女の浅はかな物欲と嫉妬を利用して財産横領のため主人夫婦を争そわせ、毒殺し、まさに完全犯罪という寸前で、思いがけないドンデン返しがあり、ミステリーとしてのおもしろさを狙っている。前作「浮世絵の女」を手がけた東史郎監督の作品。

女社長は元東映の光岡早苗が城山路子の芸名で演じている。

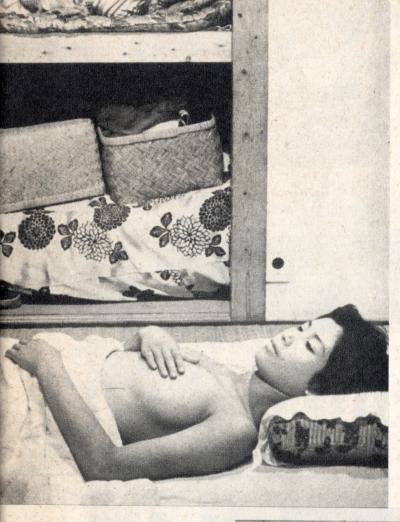
●毒　唇（国映）

橘　桂子

国映の女優橘桂子の原案で、主演している。養父に犯されたマリは、母の血をうけて、ベッド・シーンのときには相手を噛むクセがある。その噛んだ個所から毒素が回り、相手が狂い死にする…というセックス・ミステリー。都会に出たマリはショーの踊り子となり流転、男性遍歴をつづける話。みだりに異性を求めてはならない―という戒めがテーマなそう。監督関孝二。

●女の林（新東宝）

桂　奈美・波多洋二

ある一組の結婚式が開かれる。新夫の波多洋二はなかなかのプレーボーイで、かつて関係した女性が五人もいた。
その結婚披露宴に五人の女性が出席して、テーブルスピーチを行ない、かつての彼氏の行状記、いや想い出を披露する。冷汗三斗の新夫にとっては、きいてみると、なかなか楽しい過去でもあった。
かつての女性遍歴はオール情事シーンでいろどられてゆき、セクシー、ベッドシーン、お笑いありと盛り沢山の筋立て。主役の桂奈美は「漁色」に出たり最近は日劇ミュージックホールで踊っている売れっ子タレント。
かつては雑誌「漫画読本」のピン・アップのモデルになり、美しい肢態をみせたこともある。豊かなるオッパイが魅力だろう。監督山崎福次郎。

●〇〇の乳房

（青年映画芸術協会）

工藤 那美

家出した田舎娘（守井千津子）が街のチンピラにスケコマシにあう。三人のズベ公がそれを助けて仲間に入れた。守井の父親が病気ときき、三人のズベ公はにわかトルコ嬢になり、稼いだ金をもたせて田舎に帰してやる。現代版娘仁義物語。監督新藤孝衛。

●エッチ重役（明光セレクト）

香川あけみ・近衛敏明

専務（近衛敏明）と社員（杉山拳一郎）が、子会社に業務調査のため出張する。子会社では業績不振のため、増融資を受けようと必死。そこで、子会社の社長らは二人に芸者、お座敷ストリッパー、ヌードモデルの三人の女性をあてがって、籠らくしようとする。セクシーなベッドシーン、ヌードシーン、芸者のお色気シーンをフンダンにもりこんで、喜劇タッチで奇抜なお色気ドラマを展開させる。よくこの手で役人を丸めこんだり、商売の取り引きをするのが、日本のサンプル。どこまで皮肉っているかが、興味深いところ。
監督・渋谷民三。

●性の代償（センチュリー）

左京 未知子

すべての欲望がはげしい熱気のように渦巻いている現代の社会で、ひたむきに愛し純粋の愛情をあたたかく育ててゆくということが、いかに困難なことだろうか。ささやかな一握りほどの幸福をつかもうと願いながら、予期しなかった事件のために汚れない青春を無残に葬らなければならなかった若い女の悲恋を描いている。
バーのママ役になる左京未知子は、日活で活躍したセクシー・グラマー女優、そのおとろえぬ妖艶さをスクリーン一ぱいに発散させている。
監督・藤田潤八。

●激情のハイウエー（葵映画）

葵 真由美

ボーリング場で知り合った大学生の卓（松井功）と敏子（葵真由美）はインスタントに関係した。ところがはからずも敏子は卓の父脇坂（佐伯秀男）が囲う学生二号だった。

敏子に脇坂を世話した喫茶店のマダムの忠告に対しても、敏子は「フン…父子（おやこ）だからいいのよ。おやこして私を愛してるなんて、とってもスリルがあっておもしろいわよ。大人の義理なんか私には関係ないわよ！お互いに取引きでしょう」ととき入れない。

卓は忘れることのできない敏子への愛情を憎しみにかえて、全裸の敏子を無理にスポーツカーに押しこみ、深夜のハイウエーを全速力で突走った。恐怖におののく敏子…。

監督は西原儀一。

●美人局（つつもたせ）（新東宝）

牧 和子・川部 修詩

生活力のない夫（川部修詩）が妻（牧和子）の情事をみてしまったことから、功妙に妻の体を利用して荒稼ぎをしながら、結局、自分も肉体の罠に落ちてけだもののように死んでゆく……。若く美しい妻を餌食にした一人の〝つつもたせ〟の無残な最後を描いている。

牧和子と松井康子は同一人物だが、ボリューム豊かな牧が、ベッドシーンを演ずるシーンではパーッと天然色のカラーに場面がかわる。新様式のカラーだというが、いわばパートカラーである。

監督は新東宝でキャリアのある小森白。粘着力のある奔放なタッチが冴えているそうだ。

●愛　撫（センチュリー）

高美 マリ

身よりのないリエ（高美マリ）は東京でファッションモデルをしているという友達を頼って上京。友人ヨシ子はヌードモデルで、彼女のヒモに犯されてしまう。

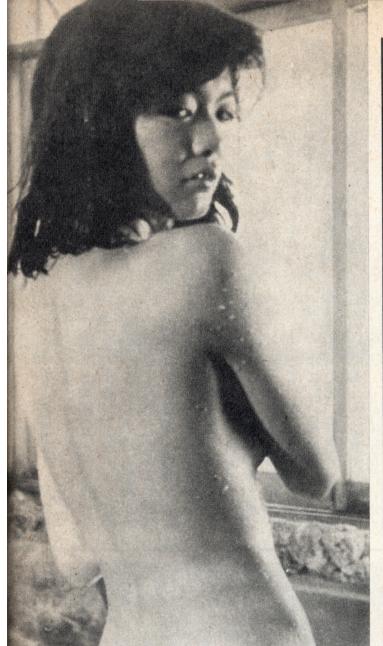
そこからリエの転落がはじまってゆく。コールガールから逃げ出し、お手伝い、バーのホステス、月三十万円の二号となる。それも四肢を金具ではめられて、皮のムチの攻めに会う異常な性の犠牲になる。そして再びヒモに狙われながら、無残にも都会の一隅で死んでいった。若い女が、幸福をつかもうとして悶えながら、虚飾と欺瞞の濁流に押し流されてゆく。

「私をいじめて！気絶するほどいじめて！」という異常な情欲場面が展開するし全身にオリーブ油を塗りベッドに寝せて、愛撫するシーンなどがみもの。

華やかな都会の裏の断面と醜い欲望の素顔をえぐり出している。〝色じかけシリーズ〟の第四話で、監督は糸文弘。坂本昭、芝三郎が共演。

●うずき（新東宝）葵 真由美

少女時代に暴力で処女を奪われた久美子（葵真由美）が、結婚して人妻になっても、当時のショックによる潜在意識により、さまざまな異常なほどの性行為を能動的に体験するという、愛の悲劇を描いている。

〝私の欲望は異常なのか〟暗い肉体の記憶から芽ばえた不毛の愛と女性の無意識な性心理を追及している。監督は土屋総五郎で、才気のある手法で演出している。

●漁色（センチュリー）

桂　奈美・島　靖子

黒く焼けた伸びきった野性的な肢体。海女たちのさまざまな愛欲の姿が、広いうなばらと、砂漠をバックに展開される。

アワビを採取するのではなく、もっぱら海女たちの漁は、イロを採取するというお話で、解放的な女体美がみどころとなっている。

桂奈美、島靖子、真山くみ子らが出演。監督沢賢介。

●夜の女炎（葵映画）

麻矢　美香

貴金属、宝石商夫婦（左京未知子・荒井清寿）が、激しい夫婦生活のさなか、妻の妹（麻矢美香）が、それをみて嫉妬し、夫を誘惑してしまう。やがて夫が腹上死し秘書が、空閨にもだえる左京の肉体にとり入ってゆく。

秘書と姉を殺して、財産を奪おうとする妹と情夫が、まず姉を毒物で気狂いにしようとする。

完全犯罪なれりと思った二人に狂ったふりをしてきた姉が、情痴の絶頂にある二つの肉体に向って復讐してゆく…。監督・山田隆。

●ギフトチェックの女（大宝映画）葵 真由美

土建会社の汚職にからんで、会社の課長が五枚つづりのギフトチェックをもらう。それは高級コールガール五人の女とセックスの交渉がもたれるチェックで、あきらかに好色を餌に贈賄のワナにおとし入れようとするものだった。

BG、大学生、人妻、芸者など、課長がつぎつぎ、五枚のチェックと交換に五人の女のセックスの贈り物をいただく。西朱実、岡竜次、葵真由美、宮田羊容らが出演している。

セックスシーンの連続で、監督は東京映画所属で十三年間も記録係をやってきた佐々木一子さんの第一回作品。

女流監督は田中絹代監督についで、二人目。

一人の清純な少女が、さまざまな試練に耐えて、魂と肉体を成長させてゆく過程を描き、彼女の目を通して醜悪な大人たちの欲望とかっとうをとらえている。大人でも子供でもない思春期、デリケートな谷間の中でなにを求めているか、未知な大人の世界へ飛びこむ不安、はじめて〝大人ってこんなことをするの？〟とその醜さと衝動、さらに悦楽を知ってゆく……。そして集団就職の問題がこの映画のテーマとなっている。坂樹まゆみ、中山恵子ら出演。監督・経堂一郎。

●女にして（関東ムービー）坂樹まゆみ

ロケ・ルポルタージュ「欲求不満」（新東宝）

独立プロでは毎日どこかでベッド・シーンや全裸シーンが撮影されている。映倫や、当局がうるさい―といいながらも、成人向映画にそれがなかったら、とても仕事にもお金にもならないのだから、規定ギリギリの線で、撮影されている。いま撮影中の創映製作、新東宝配給の「欲求不満」（監督大貫正義）のロケ現場をのぞいてみることにした。

＊　＊　＊

製作意図は、ピンク映画には珍らしく、グッと前向きである。薄給で給料運搬機の如き存在でありストレスにあえぎながらも自由と平和を求めつづけている。

「サラリーマンが、あらゆる点で疎外され、行き場を失っている生活と意見、その現実を喜劇として描く…」とテーマもいいものだ。

撮影現場は原宿駅近くのさるホテル。その一室を借り切っての撮影である。

出演は「かあちゃん」落語家の柳家小せんだが、この日はBG役の葵真由美と、妻子があって彼女と恋仲の男、九重京司とのベッドシーンだった。葵といえば、このところ「ギフトチェックの女」「激情のハイウエー」などに出ている新人。なかなかのスタイルの持主。

演技をつける大貫監督

シーンはホテルでの濃厚なベッドシーン。ユカタ姿の九重、バスタオル一枚の葵。ベッドの上に座る九重に抱きつき、甘く激しいキス

OPチェーン 9月封切番組 三本立で番組強化はかる

OPチェーンの九月以降からの基本番組がつぎの通りきまった。三本立として、番組の強化をはかる予定。

▼一週（**8／31—9／6**）「痴情の密漁」（大蔵映画）「裸の世代」（ヒロキ映画）「ほか一本」

▼二週（**7—13**）「にくい肌」（ヒロキ映画）「情欲の果て」（日本シネマ）「裏窓の女」（関東ムービー）

▼三週（**14—27**）「色地獄」（葵映画）「素肌の絶叫」（明光セレクト）「黒い白夜」（関東映配）

▼四週（**21—27**）「肉体迷路」（大蔵映画）「てんらくの詩集」（日本シネマ）「しびれる」（関東ムービー）

▼十月一週「**28—10／4**」「処女無残」（東洋シネマ）「白夜の暴漢」（東京三映社）「青い悦楽」（芸術画協会）

葵真由美の濡れ姿

シーンやら、セックスシーンが撮影されていた。

「もう離さない、もう離さない」と悶えて泣く葵の芝居はなかなか迫力があって、大貫監督はそれをアップでとらえてゆく。九重が唇から首、そして胸とキスしてゆき手がバスタオルをのけると、葵の豊かなる乳房がストレートにみえる。

美しく可れんなるオッパイでした。

「このごろは映倫がうるさくてね。台本の三分の一は要注意、セリフ演出注意の赤線が一ぱいについてとてもこの調子じゃあ、映画撮れませんよォ」と大貫監督はボヤク。

「一般向き映画じゃなく、成人向きのおとなの映画撮ってんですからねえ」と助監督氏も同調する。

それでも葵と九重のからみ合った足の裏をアップで撮ったら九重が「風にそよぐ足（葦）だね」とシャレをいい笑わせて九〇点をもらった。

ベッドシーンで葵が「目は閉じてるんですかあいてるんですか？」ときいたら、大貫監督「まあ大ていの女性は目を閉じてるんじゃないのかなあ、キミの実際の場合でいいぜ」と皮肉られ、彼女「イヤーン、バカーン」。和気あいあいの仕事ぶりである。つづいて、浴室で彼女のシャワーシーンとなった。関係者以外お断りといっても狭いから三人も入れば満員。彼女は、文字通り一糸まとわず生まれたままの姿で、冷たい？シャワーをあびた。そのライトで照らされた濡れた裸身があざやかで美しかった。

それにしても独立プロの女優さんの度胸というか、根性というかサッパリとした態度に〝仕事〟という割り切りのいいシャープさがあって気持よかった。

（ルポ・川島信子）

独立チェーン 九月番組

▼一週8/31〜9/6「絶倫」（新東宝）「招かれざる指」（センチュリー）▼二週9/7〜9/13「毒唇」（国映）「愛欲の叫び」（東京企画）▼三週9/14〜9/20「欲求不満」（新東宝）「挑発」（東京企画）▼四週9/21〜9/27「十代の牙」（国映）「快楽」（センチュリー）▼独立チェーン参加劇場＝新宿座、上野セントラル、池袋名画座、ヤエススター座、テアトル三原橋、蒲田南星座、川崎セントラル、横浜＝グリンホール、大勝館（浅草、渋谷地区は交渉中）

独立プロニュース

☆東京アイデア・プロ（代表富田騰夫氏）第一回作品として「女体の裏おもて（仮題）」を、8月24日クランク・インの予定。製作赤羽一郎、脚本・監督南博邦、主演八車新子。

☆北星映画社（代表大鶴日出男氏）「夜の亀裂」を監督甲斐清二、主演光岡早苗、鶴岡八郎で、29日クランクイン、また同社は、年内に5本の製作を予定している。

♥はなしたいこと、ききたいこと
若松孝二と「壁の中の秘事」
—ベルリン映画祭始末記—

若松孝二監督の「壁の中の秘事」(若松プロ製作)は第十五回ベルリン映画祭に出品され、賛否両論の渦となって話題となったが、同映画祭に招待され、出席してきた若松監督は帰国後、記者会見を行ない、〝ボクのような若い監督が、三百万円の映画を作って国の内外で騒がれただけで成果はあった〟とつぎのように映画祭の模様を語った。

留守中に〝壁の中の秘事〟がこんなに騒がれていたとは思わなかった。事実、出発前に映連ではベルリン映画祭事務当局に正式参加作品ではないから取り消してほしいとか映画ペンクラブで反対の声明書を出したことは知っていた。しかし審査員として参加した毎日新聞の草壁久四郎氏が、「会場は騒音のルツボと化して、日本人として恥かしくて顔をあげられなかった。国辱映画だ」と報道していたが、それが総てではないことを訂正したい。ベルリン映画祭は世界の映画配給業者の商取引きのお祭りで、まるで映画のセリ市みたいなものでしたよ。

現地の日本領事館でボクの作品の参加却下を申入れたそうだけど、審査員は十二人のうち一人を除いて賛成と決定されたものだし、そうやすやすとおろされるものではない。

抗議文は現地にいる田中路子さんのご主人デュヴァ氏が「作品をみもしないで、おろされない」と抗議文をにぎり潰してしまいましたよ。現地の新聞批評は一部事実だが、それが総てではない。はじめの回は老人が多く、カソリックの国であることから、たしかに激昂して席を立った人もいた。

それはスターリンの写真のそばで、ベッドシーンがあり「もみの木」の歌が流れたことが反感を買ったと思う。結論は賛否両論で、賛の方はリー・マービン氏が「少ない費用で作ったことがよくわかる。しかしいまの日本の状況をうまく描いていておもしろい」といわれたし、インド、トルコ、デンマークの人たちは賛辞を表してくれた。こんどの映画祭は十五回を迎えたのでマンネリズムを打破し、ドイツ映画界にカンフル注射を打とうとする狙いがあった。映画祭の権威とか伝統をうんぬんするけど、ボクはそんなものつぶせばいいと思う。

若手監督の〝性を鋭くえぐった作品〟が参加作品の傾向だったが、受賞の本命といわれた「エッケル」(反撥)とボクの作品はドイツの国民性と老令な審査員ということで理解してもらうことが難かしかったようだ」

若松監督は映画祭に出席後、スェーデン、イギリス、イタリー、フランス、香港などを回り、香港から合作の話もあったそうだ。

＊　＊　＊

(写真は記者会見で、〝三百万円で、日本中をかき回す映画を作った。本もうですよ〟と語る若松監督と同行した吉沢京夫。有楽町富士アイスで)

ピンク映画みたまま

こう暑くては仕事も思うようにいかないしいっそのこと冷房のきいた映画館で避暑気分を味あうか、そんな気持の人に、何といっても気軽な肩のこらない映画として、第6系統の独立プロ作品をおすすめしよう。

トップ・バッターは、『壁の中の秘事』がベルリン国際映画祭の正式な参加作品となって、内外に大きな話題をまいた若松孝二作品、**『冒瀆の罠』**。

こんどは、歌手の藤田功をボンドばりに大活躍させるセクシー・アクションで、主人公の行手をはばむもの、美女あり、グラマーありで、目先が変わって結構楽しいが、スマートさに欠けるきらいがある。つくづく〃007・シリーズ〃がよく出来ているかを対照的に解るというものだ。製作はケタ違いなのですからその点は十二分にマイナスするとして、次々と目の前に現われる女性を犯していく色模様（かのかづ子、森まこ、公敦子、原あけみ、岡野文子、加山リサ、ふじのたまみ、二路あおい）の変化がおもしろい。

藤田功の主人公はミスキャストで、主題歌はご愛敬もの。

冒瀆の罠

★

二番手は、この春、問題作『雪の涯て』以来、沈黙していた新藤孝衛作品**『００の乳房』**。

監督自ら浪曲調喜劇です、と断っているように、新宿を舞台に〃００のナナ一家〃の四人が男性顔まけの大あばれするお話で、おさわりバー、トルコ風呂などで男族をやっつけるところなどは、なかなか楽しくみられる。ヒロインのナナは飛鳥公子の地でゆくようなまあまあのハマリ役だが、その子分のうち、田舎出の肥った子は適役で将来が楽しい。（名前は知らず）

おさわりバー、トルコ風呂のスペシャル戦術の描写は秀逸。カメラがきれいだ。

００の乳房

★

シネ・ユニモンド製作の**『性の爆発』**は、銀座のアイビー族に焦点をあて、その奔放な行動をやくざ者の目にとまり暴力でコールガール組織に入れられるが、若者たちの友情すべてをはじきとばしてしまう、という内容で、エピソードの中にはなかなかいいものがあるが、全体のつながりとして、その素材を生かしきれていない。

出演者が、混血娘の若木アンナ、早見京子、川口武利など、内容にピッタリしたキャストで、いきいきとしている。

とにかく、エロダクションといわれてもしかたないような映画が多い。ハダカと、暴行シーンを見せるために、こじつけにストーリイを考えるてあいが、ひきもきらず出てくるのは残念だ。

★

もう少し、練り直せばどうにかなるものをと感じたのに葵映画の**『激情のハイウエー』**がある。

新人葵真由美と松井功が、現代っ子を代表するような描き方だが、ただサーフィンに狂い、お酒をのみ、ボーリングで遊び、気の合った女の子はグループの誰もが抱ける、それだけが現代っ子ではないはずで、もっと若者の地についた生活も描けなくてはウソだ。浜辺の激情的なシーンも見せ場としては、もうひとひねり必要だ。

（後藤 敏）

激情のハイウエー

「黒い雪」の余波で、このところ映倫の審査が想像を絶するほどきびしくなったという。プロでは異口同意に「これじゃあ商売できなくなっちゃう。こちらは一般向きじゃなく、おとな向きの映画作ってんだからねー」とカンスケ。

★

ある映倫審査での風景。画面は短かいパンティの女がベッドシーンをやっている。妖しいムード。審査員「あの女のズロースはもっと長いのをはかせて下さい」プロデューサー「(ギョッとなって)ズロース？いま時の若い子がそんなのはいてますかねえ？」審査員「とにかくズロースですゾ」

「黒い雪」の一場面

★

いまどきズロースなどという時代感覚。パンティといえる審査員であってほしいですなァ。

(一つ映倫特製ズロースでも発売した方が、めんどうくさくなくていいかも知れませんな)

★

〝日本映画の良心〟を守ろうという東宝が、公開できずに悩んでいるのが、とっくに完成した「けものみち」(監督須川栄三)。池内淳子が物すごいベッド・シーンを体当りでやっているので、当然、成人映画指定。東宝の柴山撮影所長「一部愛欲シーンをカットするか、撮り直して公開したい」。成人映画イコール俗悪映画と解釈しているとせば、頭の固いなんとかオバサマ婦人団体と似ているともいえる。ナンセンスな話だ。これじゃ原作の松本清張センセイ、映画界の〝黒い霧〟を書かねばなるまい。それにしても東宝の子会社でピンク映画の仕事をやっているキヌタ・ラボラトリーが商売繁昌とは皮肉なことです。

「けものみち」の池内淳子

★

国映が扱ったことしの外国ヌードカレンダーがなかなかの人気で、飛ぶように売れたことから、新東宝がピンク映画のトップ女優をモデルにした〝66年版カレンダー〟の製作をしている。松井康子、内田高子、かのかづ子、葵真由美、桂奈美、谷口朱里の六人で、六枚組のB3版。女優たちの一糸まとわぬオールヌード、セクシーなポーズを撮影した。

日本の映画女優が全裸でカレンダーのモデルになったのはこれがはじめて。さすがはエロダクション映画ブームならではだ。カメラは米田信行氏。デラックスなカラーで一部三百円前後。映画館で、九月下旬ごろから発売される。乞ご期待なそう。

★

ピンク映画の専門館はまず男性の観客が九十パーセントを占めている。そこへ、作家の倉橋由美子さんが某映画雑誌の特集記事の取材のため、東京都内のある映画館に入った。

場内は満員で、空席がなく立見をしていたら彼女にピッタリよってきた男がいる。彼女、いささかその痴漢にへきえきしたが、上映中のが、ベルリン映画祭出品で問題になった「壁の中の秘事」。「イヤなヒメゴトだったわよオ」と彼女ブルブル。

カレンダー撮影風景

その時マバタキしないで…

鈴木和夫

★ウイリアム・ワイラー監督といえば、われわれが戦後に見た「我等の生涯の最良の年」「ローマの休日」「友情ある説得」「ベン・ハー」といった一連の作品群でもわかるように、一般向け映画専門の巨匠監督であったハズだが、最新作の**「コレクター」**をみてびっくりしたなア。

これまで、ずいぶんいろいろな入浴場面を見たが、あんなにスゴイのははじめてだった。まったくマバタキどころか、呼吸をするのが困難だったくらいだった。

「コレクター」での入浴場面

★「成人映画」には入浴シーンがツキモノのようだが、サル「成人映画」マニア氏の説によると「迫力ある入浴シーンは、大スターなどを起用しない時に、しばしばお目にかかる率が高い」という。そういえば「コレクター」でお風呂に入る（入らされた）女優さん——サマンタ・エッガーは、いわゆる自宅に大プールを所有している絵にかいたような大スターではない。だから、ルックスだって、ソレでゼニになるとは思えない。そういうツキアイやすい女優さんだからわれわれ異国人にもぐっと親近感があるワケで、テレンス・スタンプの誘拐犯人にバスの中から引きずり出され柱にシバリつけられてしまうまでのカットは客席からかけつけてカバってやりたくなるほどの緊迫感がある。ムード派には嫌われるかも知れないが、この入浴場面、流石にアカデミー賞受賞監督が撮っただけあって、すごい迫力だ。こういうのを「ふた目と見られる図」という。

「コレクター」での暴行場面

★同じ週にエリザベス・テイラーの**「いそしぎ」**を見た。これも相当な「成人映画」である。ひとことでいえば、カン通もので、妻子のある牧師リチャード・バートンが、妻エバ・マリー・セイントの目を盗んで無神論者の画家テイラーと仲よくなる。この映画でもリズのセミ・ヌードがホンのチョッピリだが画面にあらわれる。百万ドルの女優も必要とあらば、そんなアラレもない恰好をしてみせるワケだ。

「いそしぎ」でのリズとバートン

★しかし、それがこの映画の見せ場ではない。見どころは実際の夫婦であるリズとバートンが、カン通をしてみせるところだろう。勝新太郎などは「オレは絶対に玉緒とラブ・シーンなどする映画には出ない」と断言している。が、やはりリズとバートンのラブ・シーンを見ていると、なんだかコチラが三枚目みたいなキモチになって来る。修養が足りんのだねえ。

「成人映画」友の会へのお誘い

あなたも友の会にお入りになりませんか。
今日からあなたもプレイボーイの仲間入り。
友の会ご入会の方にはいろいろな特典を用意してあります。

■一年分予約の方のみ年3回特別試写招待。

■スターとの交歓会。ほか……

■ご入会になるには下記の入会申込用紙に入会金百円と会費をそえて、東京都中央区銀座東六の四　村木ビル五階　現代工房「成人映画」友の会までお送り下さい。

入会申込書	
氏名	（　　才）
住所	
職業	
会費	半年分（〒共）￥　600
	一年分（〒共）￥1,000

編集後記

★今号は松竹配給「悦楽」を特集した。今後も楽しい特集をやってゆきたいと思う。

創刊号はお陰様で大変好評をえて編集部一同張切っています。なかにはおとなし過ぎたという声もあったが、おいおい内容も充実させて期待にそえる「成人映画」にしてゆきたい。

なお全国映画館発売でしたが、まだ行きわたっていない地方があります。ご注文の節は直接お申し込み下さい。

このたび銀座に移転しました。お近くにお出かけの際はぜひお寄り下さい。（K）

★独立チェーンの発足、OPチェーンの三本立てとあわただしい映画界の動きである。

映画界の不振を乗り切ろうという業界の意気込みだが、なによりもいい内容、製作費をかけた作品を提供しない限り、〝成人向映画〟はなり立たない。

本誌は単なるエロなるが故のエロをとらえるのでは決してない。

美しさと感動をそこに盛りたいと思う。（X）

★〝成人〟という名が頭につく以上、一日も早く立派な、たくましい雑誌に育てたいと思うのは、当事者のわれわれが一番痛感している点である。とはいっても、新しきものの誕生もさることながら、生まれきたものを丈夫に育てあげることは並大抵のものではない。暑さたけなわの折、なんとか〝成人〟に寸時も早く成長させるべく、編集部一同、それこそ玉の汗を流して努力しております。どうか〝成人〟の赤児を可愛がってね。（E）

●月刊「成人映画」9月号　昭和40年9月1日発行　☆本誌毎月1回1日発行　定価 100円　■編集兼発行人／川島信子　発行所／東京都中央区銀座東6の4　村木ビル5階　現代工房　電話（541）3798

かのかづ子

ボクのシネ散歩

大島渚の「悦楽」のセット・ルポ

やなせ・たかし

柿ノ木坂のスタジオについたのは夜の九時すぎであった。水蒸気の多いねっとりした夏の夜はとっぷりとくれ〝セブン・アップ〟の空瓶の一群をテーブルの上において10人ぐらいの人がボンヤリしていた。いずれも大島渚の「悦楽」のセット撮影の見学にきたのである、ひどく暑かった。

やがてゾロゾロとセットの中に入る。セットの中はさらに暑い、ライトが夜の太陽よりも激しく輝やいている。ベッドの上では裸の中村賀津雄と野川由美子が抱きあっている。

リハーサルがくりかえされる、みじかい休みの間に、二人の俳優の汗をふいたり、ウチワであおいだり大変だ。悲壮でさえある。これはボクシングの選手をセカンドがかいがいしく世話をやく風景とよく似ている。ほんの少しの休息で体調をととのえ、演技的斗争への身がまえをする。カチンコの打ち方ひとつでも現場の調子は乱れる「ヨーイ・ハイッ」のかけ声から、役者は何かに変貌しなくてはならないのだ。この緊迫した空気の中でどうしてスタッフがエロチックな気持になれようか。ましてて、大島渚監督はシャツにパンツだけで右手にメガフォンのかわりにウチワをもっている。ウナギ屋の親爺がカバヤキをする時とそっくりのスタイルだ。カメラは静かに横移動するが、カメラマンはねじり鉢巻をしている。ボクは最近土木建築現場をルポして、いわゆる土方と呼ばれていた人達が、今ではあまりにも繊細なインテリ風の紳士が多いのに驚いたが、昔の土方のイメージはこの映画現場にみごとに残されている。これはたしかに活動屋の世界だ。そしてボクはそれが実に好きだ。できればマンガ家にならずに活動屋になりたかったと今でも思うくらいだ。

うまい監督はたくさんいるが、信頼できる監督は実に少ない。大島渚さんは信頼できる。不遇の時もあったが、映画そのものが不遇の時代であったのだ。大島渚の才能のせいではない。ボクは彼がこの決してリッパとはいえない、冷房もないセットの中で元気旺盛であるのを見てうれしかった。

国映
国映株式会社
製作／矢元照雄
監督／若松孝二
藤田　功
森　まこ
★八月一週同時大公開★

恐怖と戦慄の罠！悪に挑戦する男の誓い！
冒瀆の罠（ぼうとくのわな）

女の欲と嫉妬をあやつり、財産と地位を狙う謎の影!!
悪の痴態
■製作／矢元照雄■監督／東史郎
城山路子
火鳥こずえ
大原譲二
国映株式会社

月刊「成人映画」九月号 昭和40年9月1日発行 編集兼発行人／川島信子 発行所／東京都中央区銀座東六の四村木ビル五階 電話（五四一）三七九八 現代工房 定価百円